曽田三郎著

『中国近代製糸業史の研究』

汲古書院　1994年　495ページ

飯塚　靖

I

本書は，中国の近代器械製糸業に関する著者の10数年間に及ぶ研究の成果である。本書では，上海を中心とした江蘇・浙江両省における近代器械製糸業の展開を主たる対象とし，時期的にはそれが移植された19世紀後半から1927年の南京国民政府成立までを扱っているが，常に広東・日本との比較にも留意され非常に視野の広い研究となっている。戦後日本において，中国の近代器械製糸業史を研究した単独の著書としては本書が最初のものであり，また中国近代の個別産業を通時的に研究したものとしても類書が無く，中国近代経済史研究にとって画期的成果であると言える。評者は製糸業史を専門とする者ではないが，経済史研究の後学として本書を書評したい。まず章別構成は以下の通りである。

序　章　中国近代製糸業史研究の意義と本書の構成
第1章　中国生糸の輸出市場
第2章　輸出生糸の取引について
第3章　中国製糸資本の形成
第4章　中国製糸資本の構成
第5章　製糸女工の状態
第6章　女管車と労働争議
第7章　五・三〇運動前後の労働争議
第8章　原料繭の取引について
第9章　繭行制度の動揺
結　論

II

本書は，このように本文だけで9章もあり，500ページ近くにも及ぶ大著である。史料的にも『通商彙纂』，『通商公報』，『申報』，『時報』，日本の農商務省より派遣された技術者の視察報告書など，膨大な史料を駆使して近代製糸業をめぐる豊富な史実をわれわれに提示している。その豊富な内容をつぶさに紹介することは無理なので，ここで各章毎の内容をごく簡単に紹介しよう。

序章ではまず，これまでの中国近代史研究が政治的変革勢力の形成や運動を中心とした政治史研究に偏重していたことを厳しく批判し，こうした状況を克服するため，経済史研究をとりあえず政治史研究から切り離し，中国近代史の独自の研究分野として位置付ける必要性を提起している。この点には評者も全く賛成であり，こうした研究視点の転換によって今まで見落とされていた歴史事象が再発見され，今後より豊かな近代史像が描かれてゆくものと思われる。次に著者は，日本・中国・アメリカにおける綿業・製糸業を中心とした経済史研究を詳細に検討して，著者の分析視角を提示している。それは中国における近代製糸業の展開過程の特質解明には，外部的要因（輸出市場の状態や外商の生糸取引活動）と内部的要因（資本形成，技術導入，労働力・原料の供給形態など）のどちらか一方の強調ではなく，内外要因の相互作用をこそ重視すべきであるとの提起である。さらに内部的要因に包括的に影響を与えるものとして，近代以前における産業の発展段階にも注目すべきであるとして，日本については開港前の「本格的な農民的商品経済」段階への到達，中国については「資本主義萌芽」の低水準，商品経済の未熟さが主張されるようになった最近の研究動向が紹介されている。

第1章では，近代製糸業発展を規定した外部的要因解明のため，生糸輸出市場の問題が論じられている。上海では1860年代から，広東では70年代から近代器械製糸工場が創設された。前者ではイタリア式技術がそのまま導入され，蒸気力を動力とする鉄製

製糸器械を設置し，外国人技師による生産管理で高品質生糸を生産し，後者では改良足踏繰糸器械の設置など外来技術と伝統技術の折衷形態を取り，製品品質は低位であった。こうして19世紀末から器械糸の輸出が増大した。その輸出先はヨーロッパ特にフランスが中心であり，同国絹織物業はながく手織機を使用し，力織機普及後も織工の技巧を尊重して，多様な生糸を駆使して高級絹織物をはじめとした多様な製品を生産していた。上海輸出器械糸は高品質（細糸・繊度斉一など）であり，高級絹織物原料となった。広東糸は質的に各国生糸の最下位に位置し，普通織物の緯糸用であった。他方，アメリカ絹織物業では労賃高から急速に力織機が普及し，原料生糸も余分な労働力投入を必要としない大量・均一品への需要が高まり，日本からの輸入が増大した。上海器械糸は，生産量が少なく割高で品質も不統一なため十分進出できなかった。だが第一次世界大戦の勃発以降，中国生糸のアメリカ向け輸出は増加し，同国絹織物業界もその輸入増進に具体的に着手し，蚕糸業改良にも関与し始めた。本書では，この輸出市場のフランスからアメリカへの転換の可能性と，それに対する日米側，中国製糸資本家側の対応がきわめて具体的に論じられており，たいへん興味深い。本章で評者が不満とする点は，1920年代の記述が政策論に重点が置かれ，中国の生糸輸出と国外生糸市場の客観的状況の説明がやや不足していることである。1920年代には中国の生糸輸出も増加したが，反面日本の輸出量が急増し，日中間で大きな格差が生じた時期である。こうした事態はなぜ発生したのかを，輸入市場の面からも論じてもらいたかった。

第２章では，生糸輸出を担う外商の状態と生糸取引の形態とを検討している。中国からの生糸輸出は，1920年代以前は完全に外商に掌握されていた。ただその外商の構成も第一次大戦を契機にかなり変動した。大戦以前は上海・広州ともにイギリス・ドイツ・フランス３カ国の商社が大きな勢力を占めていたが，大戦以後はドイツ商が撤退し，その他ヨーロッパ系商社も後退するなか，日本・アメリカの商社が台頭した。上海では外商の力が強く製糸金融も彼らが握り，生糸売込商・糸号は手数料目的の仲介機能を果すのみの場合が多く，外商と製糸工場の生糸取引形態は先約取引が主流であり，製品の検査権が外商側に握られるなど，製糸工場側に不利な点を多々含んでいた。

第３章では，江浙地域の製糸資本の発展とそれを規定した蚕糸業地域の内部的要因が考察されている。同地域では1870年代末から外商主導の下に，本格的な製糸工場の建設が進められた。その後建設は停滞したが，日清戦争直後には官民の民族意識の高揚から民族資本を主体に工場の急増を見，外国資本は同事業より撤退した。その民族資本の源泉は，上海では生糸売込商と買辦であり，無錫などでは郷紳であった。しかし1899年以降７，８年間，製糸資本は低迷状態に陥った。その要因は，ヨーロッパ式大規模工場が多額の固定資本を必要とし流動資本を圧迫したこと，外国人技師に依存して熟練女工を養成したが急激な工場増加で適性労働力確保が困難となったこと，養蚕と製糸の社会的分業未発達による原料繭の価格騰貴と品質低下にあった。要するに，製糸工場の急増を受け入れる社会経済的条件が，江浙地方に未整備だったのである。だが1907年以降20年代末まで，同地方の近代製糸業は量的に発展の軌道に乗った。それは，租廠制の普及，外国人技師の中国人による代替化，繭行制度の成立とその下での乾繭取引の普及，外商・銭荘・銀行による製糸金融の発展などによって先の困難が克服されたためである。ただこうした条件は，第一次大戦後に輸出市場の転換を図ろうとした際に，新たな桎梏ともなった。まず租廠制の存在が製糸技術の改良を困難にし，また乾繭取引普及は繭の品質改良への工場側の働き掛けを困難にした。以上のように本章までで展開された論理は，江浙地域では日本・広東と違い移植された製糸技術に改良は施されなかったが，他方で経営形態，原料繭市場，金融制度を巧みに変革し大規模工場生産に適応させフランス向け高品質生糸の生産体制を築いたが，1920年代に入り輸出市場転換に迫られるとそうした経営形態などが新たな桎梏になるという内容であり，本書全体の核心的部分であると言える。

第４章では，南京政府成立前夜を時期的目安に，中国製糸資本の内部構成について分析を加えている。

まず外国資本としては，第一次大戦以後山東省などに進出した日本資本があるがその勢力は微弱であった。次に民族的資本としては，小製糸資本と大製糸資本があった。前者は，租廠制に依拠し経営は不安定であったが，民族的製糸資本の総体としての量的発展に貢献した。後者は，数的には少数であるが，長期的・安定的に経営を維持し，租廠制に依存せず，豊富な流動資本も有し，優良生糸の生産を行ない，比較的安定的に利益を上げ，資本の内部蓄積もなされていた。ただその経営者には買辦・生糸売込商を兼ねる者が多く，上海の大製糸資本の「前期性」「買辦性」を主張する根拠ともなっている。著者はそうした主張に対し，買辦・生糸売込商ともに製糸工場の経営に乗り出すなかで，本来の機能は縮小する方向にあったと批判している。

第5章では，製糸業労働者の存在状態が研究されている。製糸女工の供給源は，都市に流入し滞留する下層民であり，特に江北出身者が多く，出身地ごとに幇を形成していた。見習女工はまず益工として正車（正規の繰糸女工）に徒弟的に従い，補助的労働に従事しながら繰糸技術を習得した。工場の繰糸室には，48釜（女工数77人）程度を一単位に1人の管車が配置され，通常それは男性で女工の募集と労働の監督に責任を負っていた。この管車の助手となり女工のリーダーとなるものが女工頭（通称女管車）であり，出身地ごとの各幇内部でも中心的人物となっていた。製糸女工の労働時間・賃金等の労働条件は劣悪であり，1922年からの労働争議の本格的な展開は名目賃金を押し上げたが，女工の生活改善にはあまり貢献しなかった。他方，製糸工場にとっては，人絹糸の進出によって生糸価格の上昇も期待できず，そうした賃金上昇の中で経営を維持するためには生産過程の合理化が迫られた。

第6・7章では，1922年から26年までの上海製糸業における争議史が研究されている。まず1922年の争議は，女管車が主導し，ILO創設や国内キリスト教系婦人団体の活動の影響を受けていた。1924年の争議は，賃金をめぐり自然発生的に生じたものであるが，その解決交渉に女管車層が乗り出し，賃上げと女工団体結成認可を勝ち取った。こうして結成された糸繭女工会は，女管車と正車のみを会員とし，労使協調の立場からの紛争発生防止を任務とした。同会の活動により，5・30運動の製糸業への波及は回避されたが，1926年の争議では，明確に上海総工会の影響が強まった。

第8・9章では，原料繭の流通問題について繭行制度を中心に検討している。江浙地域の伝統的蚕糸業地では養蚕農家が自家で製糸し，繭の商品化は進んでいなかった。ただ新興産繭地の無錫と紹興では，繭取引が比較的普及していた。1880年代より製糸工場は，無錫などの産繭地に繭の買入所と乾燥設備を設置し生繭の買付けにあたった。これが繭行であるが，その設立には在来糸商の妨害があり，また利益を当て込んだ在地の小商人や「劣紳」の介入があった。そこで1910年代頃には，工場は繭行経営から手を引き，在地有力者の郷紳が設置したものを賃借りするようになった。こうして工場は，郷紳の権威に依拠して原料繭の安定した買付けを実現したのである。ただこのことは原料流通過程に繭行所有郷紳の独自の利害を介在させることにもなった。各地の繭行主は同業団体である繭業公所を設立し，共同して養蚕農民に対処し，また買付者間の競争を排除しようとした。江浙地域では，在来の絹織物業からの要請があり繭行の開設規制が打ち出され，既存の繭行も既得権益を守るためにそれに同調した。この繭行開設規制は繭の出回り量を抑え，製糸工場の経営にはマイナスとなった。だが1920年代後半には，養蚕農民側からの繭行開設規制の緩和要求が高まり，また絹織物業でも人絹糸使用が増大し，製糸業側もアメリカ市場向け輸出のために良質の繭を多量に確保する上で開設規制を桎梏と感じるようになり，繭行制度が動揺した。

III

このように本書は，中国の近代製糸業史について，製糸資本・技術・労働から輸出市場・製糸金融・原料問題，さらには労働運動までを扱い，非常に視野が広くかつ緻密な実証がなされた優れた研究書である。専門外の評者にはその事実関係を詳細に検討す

る力量はない。そこでここでは，全体を通読して抱いた若干の疑問点と感想を上げるだけに止める。

第1に，研究史の整理に関してである。本書を通読する限り，著者の近代製糸業展開の論理は，旧来の停滞論を否定する内容に思われる。だが，日中の比較から中国近代製糸業の技術的停滞を説く清川雪彦氏の研究（「戦前中国の蚕糸業に関する若干の考察(1)――製糸技術の停滞性――」『経済研究』〔一橋大学経済研究所〕第26巻第3号　1975年7月）などをどのように評価し，それにどのようなアンチテーゼを提起するのか，それが序章や結論部分で明確な形で提示されておらず，評者は不満を感じた。

第2に，19世紀末の江浙社会へのヨーロッパ式大規模製糸工場の本格的導入後，それと同地の社会経済状態との不適合が明確になった段階で，なぜ伝統技術と折衷したより適合的技術を作ろうという動きが起こらなかったのかという点である。たしかに非産繭地の上海ではそれは無理であろうが，地方の産繭地ならばそうした可能性もあったのではないか。たとえば，江浙在来の足踏繰糸器に改良を加えそれを利用する工場を作ったり，あるいは日本の諏訪型製糸のようにヨーロッパ式技術をより簡便なものに改良し小規模工場を建設するような動きが，なぜ起こらなかったのであろうか。著者はその理由を，在来製糸業が養蚕農家の副業として行なわれ生繭販売が普及せず，在来製糸業と国内絹織物業が強く結合し在来糸の輸出貿易への吸引度が低いことに求めている。だが，在来糸の総生産額に占める輸出割合は確かに低いとはいえ多額の在来糸が輸出されていたわけであり，また無錫などでは生繭販売も進んでいたのであり，この理由だけでは十分な説得性に欠けるように思われる。そうした在来糸の生産・流通に関係する在地の勢力から，なぜより適合的な製糸技術を模索する技術革新の動きが発生しなかったのであろうか。この問題は，その後の江浙地域の近代製糸業の展開過程をも決定付けた重要な問題であり，実証を通じてより深めてもらいたかった。

第3に，1920年代の近代製糸業の展開をどのように説明するかという点である。すなわちこの時期，繭の品質悪化，労賃高騰，ヨーロッパ輸出停滞などによる経営困難が指摘され，また輸出市場転換のための製糸技術をはじめとした諸改革も十分な成果に結び付かなかったとされている。他方では，工場数や生糸輸出額の増加の事実も指摘され，収益と資本蓄積の可能性も否定されていない。だが本書では，こうした1920年代の製糸業経営の動向について記述が各所に分散してしまっており，全体としてどのような状況にあったのかがたいへんとらえにくい。まず，生糸の海外市場の状況と内外価格の推移を示し，それが内部的要因とも絡まり製糸工場経営にどう影響したのかをよりまとまった形で示す必要があったのではないか。さらにこの時期の新設工場は，それ以前と同じくヨーロッパ式大規模工場なのか，それともアメリカ輸出への対応から日本式工場も建設されたのか，またそれは製糸資本が自社工場として建設したものか租廠を目的とするものであったのか，こうした点もぜひより詳細に解明して，当期の製糸業展開の特色を明確に示してもらいたかった。

第4に，日中の近代製糸業の技術力・生産力格差を生み出した要因は何かという疑問は，本書でも完全に払拭されていない。本書では，開港前の日中の産業発展段階の差異は承認され，それが輸出市場という外部的要因とも絡まって両国の近代製糸業の展開を規定したことが指摘されている。評者もその点には異論がない。たださらに評者は，そうした産業発展段階の差異は，当該社会を構成する人間の思考・行動様式にも当然相違をもたらすはずであり，そうした相違こそが両国製糸業の帰趨を決定した重要要因ではないかと考えるのである。つまり，中国で近代製糸業の展開を担った商人・郷紳層はそれまでの伝統的思考・行動様式から容易に抜け出すことができず，これが清川雪彦氏の言う中国製糸業における「企業家精神の不足」をもたらしたのではないか。たとえば，租廠制普及の理由も，工場所有者側には生産活動を軽視し賃貸し収入に頼るという商人・郷紳の伝統的意識があり，他方賃借りする側にも地道な企業経営で発展を図るよりも好機をつかんで僥倖を得たいという投機的な商人意識が作用したのではないか。こうした貸す側，借りる側双方の伝統的思考・行動様式の残存が租廠制普及の一因では

なかったのか。もちろんこうした人間の思考・行動様式を固定化してとらえるのは誤りであり，それは社会・経済・文化の発展により絶えず変動するものであり，中国社会においても経済発展により急激な変革に見舞われ，日本との競争に打ち勝つべく経営努力を重ねる資本家層も徐々に形成されてゆくのではないか。

本書は近代器械製糸業の展開を主軸に据えたため，残された課題もいろいろとある。まず，中国資本主義発展史の中で，製糸資本の果した役割を検証する作業である。すなわち生糸輸出による外貨獲得は経済発展にどのように貢献したのか，製糸資本の形成は資本蓄積にいかなる役割を果したのか，製糸工業の展開は機械工業や電力産業などの発展にいかなる効果をもたらしたのか，などが課題となろう。次に，在来製糸や国内絹織物など伝統的部門の検討も不可欠であろう。それは1920年代に入っても，在来糸は広大な国内市場を有すると同時に，輸出でも依然として大きな比重を占めていたからである。なぜ中国ではこうした在来製糸が広汎に存続するのか，それは輸出や国内絹織物業とどのような関係を持つのか，こうした研究も中国経済の特質把握には不可欠のように思われる。さらに，製糸業は原料繭の生産に大きく規定されるので，近代製糸業の研究のためにも繭生産の検討は不可欠と思われる。1920年代に中国が日本に生糸輸出量で大きく離されるのも，そうした原料繭の生産量の制約があったためではないのか。そのためには養蚕地域の農民層分解論，養蚕農家の経営構造論などの研究も不可欠であろう。

以上のようにいろいろと私見を述べたが，これも明晰な論理展開と豊富な実証を兼ね備えた本書に非常な知的啓発を受けたからであり，少しも本書の価値を低めるものではない。むしろ本書は，中国製糸業史研究を専門とする者だけでなく，日本製糸業史，中国近代史などを研究する者にとっても必読の書であると言える。最後に，もし評者の浅学により誤読に基づく誤った批判があったら御寛恕願いたい。

（中国研究家）